

2024年の大暑は7月22日です。大暑（たいしょ）とは一年の中で最も暑い頃とされ、セミが鳴きはじめ、サルスベリが咲く頃ともされています。

体力を保つために鰻を食べる「土用の丑」や、各地でのお祭り、花火大会もこの期間にたくさん行われ、夏の風物詩が目白押しです。

「奥の細道」の中の一句、山形県立石寺（りっしゃくじ）で7月13日に詠んだ句。

『閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声』 松尾芭蕉

（読み方：しずかさや いわにしみいる せみのこえ）

「なんと静かなことだろう。鳴いている蟬の声もまるで岩にしみこんでいくようだ。」という意味。梅雨明けが待ち遠しい季節の俳句です。



東北の短い夏。一斉に弾けるように各地でお祭りが賑やかに始まります。

【8月1日 弘前ねぶた祭り】

三国志や水滸伝などの武者絵等を題材とした大小約80台の勇壮華麗なねぶたが弘前市を練り歩く夏まつりです。

弘前のねぶたまつりの見どころのひとつは、この祭りばやしの一隊に加わる津軽情っ張り大太鼓。

笛・太鼓のお囃子（はやし）につれて「ヤーヤド、ヤーヤド」の掛声で氣勢をあげて大勢が山車を引きます。

弘前のねぶたは、平面の絵画でありながら、飛び出さんばかりの迫力で描かれ、表が武者や英雄、裏は美人画や水墨画の、静と動が表裏一体で表現されています。山車は大型の燈籠で、扇ねぶたが主ですが、人形型の組ねぶたも見られます。



【8月1日 盛岡さんさ祭り】

日本一の太鼓パレードとして知られています。色鮮やかな衣装に身を包み、力強いリズムで太鼓を叩きながら華やかな踊りを披露。大迫力の太鼓の音と笛に、人々の熱気を感じられる圧巻の群舞を楽しめます。



【8月2日 青森ねぶた祭り】

笛や太鼓のお囃子に合わせて舞う踊り子たちのことを「跳人（ハネト）」と呼び、「ラッセラー」という独特な掛け声で祭りの雰囲気盛り上げます。
ねぶたのデザインは毎年異なり歴史や伝説を題材にした巨大なねぶた灯籠が町を練り歩く様子は圧巻。



【8月3日 秋田竿燈祭り】

260年以上の歴史を持つ国重要無形民俗文化財
夏の邪気払いや五穀豊穡を祈ってはじまったとのこと。
竿燈の上げ手たちは、頭や肩、腰で竿燈を支え、その華やかな技術は一見の価値があります。
提灯を米俵に、全体を稲穂に見立てた竿燈は、大きなもので全長10m、重さ50kgを超えます。
熟練の職人たちが繰り出す技のひとつひとつが、観客たちを引き込み、お祭りのボルテージを引き上げていきます。



【8月5日 山形花笠祭り】

祭りは、華やかに彩られた蔵王大権現の山車を先頭に、「ヤッショ、マカショ」の掛け声と勇壮な花笠太鼓を伴奏に、たくさんの踊り手が花笠音頭にあわせて踊りながら市内の目抜き通りをパレードします。
あでやかな衣装に身を包んだ、1万人を超える踊り手の、躍動感あふれるダイナミックな踊りと、山形の花である『紅花』をあしらった笠の波がうねり、咲きこぼれます。



【8月6日 仙台七夕祭り】

「仙台七夕まつり」は豊作を田の神に祈るためにはじまったとされるお祭りで、戦後少しずつその規模を拡大してきました。
華やかな七夕飾りが市内を彩り、特にアーケード街に並ぶ色とりどりの飾りは息をのむ美しさです。
飾りは長さ5~10メートルに及ぶ、同じデザインのないくす玉をつけた吹き流しが主体で全て和紙や紙で、毎年新しく一つ一つ手作りされたものです。

